



ON THE NATURE OF QUANTIFICATIONAL EXPRESSIONS AND THEIR LOGICAL FORM

岸本, 秀樹

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1991-03-31

(Date of Publication)

2007-10-16

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲1059

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.11501/2964494>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1001059>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	きし もと ひで き 樹 (兵庫県)
学位の種類	学 術 博 士
学位記番号	学博い第192号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与の日付	平成3年3月31日
学位論文題目	ON THE NATURE OF QUANTIFICATIONAL EXPRESSIONS AND THEIR LOGICAL FORM (量化表現の特性とその論理形式について)
審 査 委 員	主査 教授 笥 寿 雄 教授 柴 谷 方 良 教授 眞 方 忠 道 教授 向 井 守 教授 小 林 萬 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、チョムスキーの最新理論である統率・束縛理論 (Government and Binding Theory) において問題視されている、WH 移動の現象に対する理論的結論の導出をその目標としている。

問題の所在はWH要素の移動が「下接の条件」といかに関わるかという点にあるが、これに対する現在もっとも有力な見解は、WH 移動は統語レベルでは、名詞句または節を二つ以上越えてはならないとする「下接の条件」に従うが、論理形式 (Logical form) のレベルでは「下接の条件」に従わない、とするものである。これに対して論者はまず、このような見解は、同じ移動現象をレベルの違いにおいて二分し、一貫性のある記述を阻むばかりか、移動現象に対してレベル間において違った振舞いを許す点から統語理論を弱めるものである、と理論的疑義を呈する。

次に、このような問題点を回避できる分析の可能性として、一見「下接の条件」に抵触する移動現象を WH 要素の直接的移動ではなく、WH 句を含む構造全体を一旦移動させ、つまりパイドパイピング (pied-piping) と呼ばれる移動を仮定し、その後「下接の条件」に抵触しない状況において WH 句を移動させるという、いわゆるパイドパイピング分析を検討する。

本論文の主要部は、パイドパイピング分析の妥当性を検証することに向けられ、議論は、特に日本語ならびにシンハラ語からの強力な証拠を軸に展開し、英語、日本語、シンハラ語における WH 疑問文、譲歩文に関わる複雑多岐にわたる議論は、WH 移動は総ての文法レベルにおいて「下接の条件」に従うという統語論上の普遍的制約の設定に向けて収れんされる。

本論文の構成は、第1章の Introduction から終章第6章にわたり、英文 A4 版で300 ページを超える大著となっているが、以下に各章の要旨をまとめる。

第1章 Introduction では、本研究の理論的位置づけがなされ、それに先だって、生成文法の最先端理論である、統率・束縛理論の紹介・解説がなされている。特に、本論文の主題である論理形式の性格についての考察がある。論理形式とは、その名称にも関わらず、統語構造の一形式であるという点が本論の主題と密接に関わっている。

すなわち、文の意味解釈のインプットである論理形式は、D-structure (深層構造) と S-structure (表層構造) とならぶ統語構造の表示の一形式であり、それゆえ D-structure から S-structure への派生過程と同じ変形規則の適用を受けその形式が定められるのである。したがって、WH 移動についても、D-structure から S-structure への派生と S-structure から論理形式への派生において「下接の条件」に関して不統一であるのは好ましくないとするのが、本論の理論的主張であり、本論の出発点となっている。

第2章 Unselective binding and multiple WH questions では、WH 移動の基本的性格を理解するために、WH 移動の起こる典型的な言語として英語の WH 疑問文をとりあげ、特に多重 WH 疑問に焦点を当てる。

本論が問題視する立場、つまり「S-structure で起こる WH 移動は下接の条件に従うが、論理構造での移動はこの条件に従わない」とする見解は、*What did you wonder where you bought? というタイプの文と Who wonders where you bought what? といったタイプの文の間に見られる文法性の対立がその基礎となっている。すなわち、後者のタイプの文では論理形式において目的語の what が下接の条件を破って文頭に移動されるという分析が論拠となっているわけであるが、論者は、Heim (1982) の、Every man who owns a donkey beats it といった、通常「ロバ文」(donkey sentence) と呼ばれる文の分析を参考にしつつ、英語の多重 WH 疑問文は論理形式で WH 移動が起こらないということを主張し、英語における下接の条件の違反は現実には起こらないことを示すとともに、英語の多重 WH 疑問文を見ただけでは、論理形式で起こる WH 移動の特性を調べることは出来ないという結論を導き出す。

この結論を受け、第3章 LF pied piping : evidence from Sinhalese では、スリランカの国語シンハラ語の WH 疑問文を検討する。シンハラ語には、その WH 疑問文において、疑問助詞 da が WH 要素の量化領域を決め、論理形式で移動をうける構成素を指定する働きをし、疑問助詞が付加される位置をみることによって、何が論理形式で移動されているかが判断できる特質がある。これによって、シンハラ語では論理形式での移動に関する制約が表層構造によって確かめることができる。

本章では、このシンハラ語の特性をフルに活用して、論理形式における WH 移動が下接の条件に従うことを証明する。その過程において、一見下接の条件に反するように見える移動現象は、実はパイプパイピングが関わっていて、WH 移動の部分は下接の条件に従うということを議論する。

第4章 Subjacency and the concessive constructions in Sinhalese と第5章 The LF output of pied piped sentences においては、先の章で議論されたパイプパイピング分析の妥当性をより強固なものにする為に、シンハラ語ならびに日本語における譲歩文を検討する。

まず、第4章では、シンハラ語の譲歩文における WH 移動も下接の条件に従うことを示す

とともに、譲歩文の補文の位置に現れる疑問要素が論理形式で移動された WH 句を認可 (license) しているということを示す。また、量化表現のスコープのあり方から、譲歩文においても WH 句を含む構造全体がパイプパイプされているという結論を導き出す。

さらに第5章では、日本語の譲歩文における量化表現のスコープの状況を検討し、パイプパイプされた構造の中の WH 句はそれ自体演算子の働きを持たず、パイプパイプされた構造全体があたかも一つの演算子のように働くことを示す。このような分析を通して、WH 句を含む構造がパイプパイピングによって移動されるとする分析において、WH 句は疑問助詞に対してどのような関係を論理形式において持つのかという点を明らかにし、パイプパイピング分析の妥当性をより強固なものとしている。

最終章の第6章 Scrambling, bound anaphora and LF reconstruction では、本論において展開されてきた分析において残る問題点として、日本語の代名詞の変項 (variable) としての働きの問題をとりあげる。「それ」といった日本語の代名詞が変項として働き得る可能性があれば、「どの論文を書いた学生が来ても、山田先生はそれを学会誌に投稿することを勧めた」というような文は、これまでの本論の主張に反して下接の条件を破ることになる。

これに対し、論者は問題の代名詞は変項としては働かないということを示し、譲歩文における「かきまぜ規則」の作用ならびに論理形式における再構成 (reconstruction) の状況などを検討することによって、問題の代名詞は論理形式に到達する前の段階で解釈を受け、よってそれは論理形式のレベルでは変項として働かないという結論を下す。

以上が本論文の内容要旨であるが、本研究は、透徹した論理構築およびその正当化のための説得力のある議論の展開によって、理論の制限という普遍文法理論の中心的課題に新たなメスを入れた優れた論考である。

論文審査の結果の要旨

1957年にチョムスキーによって提唱された生成文法理論は幾多の変遷を経て発達・展開の途にあるが、近年の最大の課題はいかに変形部門を制限し、理論をより強固なものにするかということである。その結果、変形操作を移動規則のみに制限する方向が示され、現在は移動規則の特性にかかわる研究がなされている。移動規則の中心的位置を占めるのが、WH 疑問文の WH 要素の移動である。

岸本秀樹の研究は、このような WH 要素の移動について、英語、日本語およびシンハラ語という、類型的に異なる言語のデータを基礎に、理論的考察を展開したものである。なにぶん、本論文は生成文法の最先端領域の研究であるため、抽象的な理論的考察により構成されており、専門家以外には難解な記述を余儀なくされている部分もあるものの、全体的には理論と実証のバランスのとれた、高水準の博士論文であるとの判断が下される。

内容的には、まず理論的考察として、論理形式における WH 句移動には「下接の条件」が働かないとする現在主流をなす立場が論じられる。これに対して論者は、そのような考え方は理論の弱体化

を招き、好ましくないものであるとする。

岸本のこの立場は、幼児による言語習得の観点からの普遍文法のあり方に対する議論に依拠するものであるが、もちろん、経験科学たらんとする言語学にとっては、理論の正当化には常に実証性が要求されるわけであり、岸本論文の主要部は、移動規則は「下接の条件」に常に従うという理論的立場を保証する為の分析の採択と、その妥当性を英語、日本語、シンハラ語の WH 現象の分析に求めることに当てられている。

具体的には、統語構造に現れる英語などの WH 移動に対して、日本語やシンハラ語では論理形式における WH 移動を仮定し、これら二つのタイプの言語間の WH 句の意味解釈における平行性を捉えたとともに、論理の弱体化を防ぐために統語レベルにおける制約を論理形式にも課し、それを満足させる分析の根拠をシンハラ語に求めるという、非常に綿密な分析が展開されている。その論考を展開するにあたって、単に疑問表現のみならず、全称量子子を含む一般的な量子子表現から多重 WH 疑問文、譲歩文、それに語順変換規則なども考察の範囲に入れ、議論に深みばかりでなく、十分な幅を持たせている。

最初に述べたように、本論文は生成文法理論の最先端の領域を扱ったものであり、今後とも複雑多岐にわたる展開が予想されるものである。しかし、本論文は、その緻密な分析においてひとつの明確な方向を示しており、その功績は大であると考えられる。よって、本審査委員会は、論文提出者岸本秀樹が学術博士の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定する。